

2003年度渥美奨学生のページ 「自己紹介」

蔡 相憲	「家族みんなの留学」 -----	29
張 桂娥	「なぜ異文化間における児童文学作品の交流状況を研究するのか」 -----	30
フ ス レ	「隠された歴史をさぐる」 -----	31
金 賢旭	「表面的でない日本文化論を語っていきたい」 -----	32
郭 智雄	「日本に留学するまでの私」 -----	33
林 少陽	「境界線での思考力を得るために」 -----	34
陸 躍鋒	「日中技術交流の発展に向けて」 -----	35
朴 貞姫	「言語との触れ合いは文化との触れ合い」 -----	36
ティシ、マリア エレナ	「日本ー私の児童文学世界への扉ー」 -----	37
ヤマグチ、アナ エリーザ	「日系人研究と社会貢献を目指す」 -----	38
尹 熙淑	「今の私があるまで」 -----	39
臧 俐	「日本への憧れとわたしの夢」 -----	40

家族みんなの留学

チェ サン ホン
蔡 相 憲

出身国：韓国

在籍大学：東京農工大連合農学研究科生物生産学専攻

博士論文テーマ：根寄生雑草オロバンキ、特にヤセウツボの種子発芽の制御に関する研究



私は留学する前、韓国企業で11年間研究を続けてきました。その間、韓国で最初の新型除草剤の研究開発に成功し、大統領賞を授かる栄誉を受け、その除草剤は今、全世界に向けて販売されております。一人の研究者として世の中に役立つことができたという幸せを感じていました。このように恵まれた環境でしたが、私は新たな世界にチャレンジするために退社し、日本に私費留学することを決断しました。

このような決断を下す際には、妻と二人で、予想される様々な問題について何度も話し合い、検討を重ねました。何よりも重要だったことは、我々の人生について二人でコンセンサスを図ることでした。人生のビジョンを二人で共有することでした。何事にもやや挑戦的すぎる性格の私に対して、妻は初め多少の不安もあったようですが、5年間の結婚生活で二人の間には分かり合えるものが形成されていました。子供達が直面する環境の変化や言葉の壁にも悩みましたが、当時5才の長男は飛行機に乗れるということだけで賛成してくれました。彼らが成長した時、自分たちの両親の決断に拍手を贈ってくれるのでしょうか。しかし、海外生活は子供にとっても素晴らしい勉強の機会です。彼らが担うべき21世紀後半には、真の国際人が求められるでしょう。国や民族という垣根を越えて、一人の地球市民であることを自覚することが最も重要なことだと思います。そのためにも幼い時から国や民族、人種、文化という多くの面から相手を理解し、尊重する姿勢を身につけることこそが、本当に素晴らしい勉強になると信じています。

現在、世界では、飢饉で1分間に24名が死亡し、人類の1/6の人が夕食を食べずに就寝するというのが実態です。アフリカなどで食糧生産性低下の最も大きな原因は、害虫や植物の病気よりも寄生雑草です。

私の研究テーマは「寄生雑草の生態生理と防除」です。日本で研究と勉強を懸命に行い、その成果を通して、発展途上国の食糧難にわずかかも知れませんが、寄与できると信じています。

学位取得後は、食文化を専攻する妻と私は、二人ともそれぞれが以前所属していた研究所に復帰できる予定ですので、二人とも食糧に関する研究が続けられることになりました。今後も一生懸命努力して、退職そして留学という当時の私たちの決断が、自分の家族にとっても、人類にとっても実りの多いこととなるように、頑張っていきたいと思っています。

なぜ異文化間における児童文学作品の交流状況を研究するのか

ちょう けい が
張 桂娥

出身国：台湾

在籍大学：東京学芸大学大学院学校教育学（言語文化）専攻

博士論文テーマ：異文化圏における物語受容の研究：戦後日本と台湾の児童文学作品交流状況をめぐって



異文化とは何なのか？

異文化理解の土台作りに何をすべきなのか？

「朝やけ小やけだ 大漁だ 大ばいわしの 大漁だ。
はまは祭りの ようだけど 海のなかでは
何万の いわしのとむらい するだろう。」

（金子みすゞ「大漁」）

大漁でもりあがった人間の高笑いの響きも届かない海底で、魚たちは、仲間たちを永遠に失った悲しみに包まれているという悲惨な光景は、この児童詩と出会うまでに、一度も想像したことがなかった。アメリカ同時多発テロ事件発生後一年余が経った今、この詩に再び目を通したとき、昨冬から「正義」という大義名分のもとに始めた一連の軍事制裁「報復戦争」に巻き込まれ、犠牲になった無数のアフガン難民やイスラエル関連者及び一般人のことや、今年の春先から突然勃発したブッシュ政権対イラクの正義なき戦争に、明るい未来と希望を奪われた犠牲者たちの無念さを思い出し、戦慄が全身を走る恐怖感を感じてならなかった。

社会学研究者雨崎良未氏の「オリエンタリズム」についての解釈であるが、アメリカや西欧諸国は、「自分以外の文化に野蛮・神秘・遅れている・受け身だ、などのイメージを勝手に押しつけて、異文化を自己中心的に解釈している」という。これに対し、アラブをはじめとする各文化圏からよく異議申し立てが起こっている。また、「オリエンタリズムは、西欧のみに限らず、ほかならぬ、この日本においても、東南アジアへの不理解と蔑視、国内の差別の放置など、さまざまな問題を生んでいる」と述べた氏の考え方に、私も同感しているのである。

児童文学作品の世界でも、「ちびくろさんぼ」や「シナの五人兄弟」のように、人種差別に当たる問題や

地域文化を矮小化する疑いなどで、様々な議論を巻き起こした問題作があれば、筆頭に挙げた「大漁」のように、自己中心的立場から思考・行動する人たちに、相手を傷つける前に、相手の立場を考えてみないかという視点を優しく気づかせてくれる秀作も多々あるのである。

異文化とは何なのか？お互いの立場を理解するのはあり得ないことなのか？異文化への偏見を無くし、各文化集団がお互いに対等的にコミュニケーションできる環境を作るために、我々地球市民に何ができるのか？児童文学研究者としての私は、異文化間における物語受容の研究を通して、グローバル規模にも通用するような優れた児童文学作品の特質を分析し、人類の未来を託された子どもや青少年たちの異文化理解教育に役立つ児童文学作品の伝達・流通に尽力したい。

語学力が不十分なので、まず、自分自身にとってもっとも身近な二つの文化集団—日本と台湾の児童文学作品の交流状況を中心に、「異文化間における物語受容の研究」という大きな課題へアプローチすることにした。今回の研究課題を通して、戦後台湾と日本の児童文学作品の交流状況を調査したうえ、異文化間における物語受容のイデオロギー及びその意義を見だし、本当に優れた児童文学作品のあり方や、理想的な翻訳受容の仕組み、オリジナル作品からいただいた感動をリアルに子どもたちに伝える方法などを追究したい。

また、本研究の考察結果に基づき、異文化間における児童文学作品交流の機能を高め、優れた物語の翻訳受容を実現させ、日本と台湾の子どもたちに、地球市民たる「ものの見方、考え方、感じ方」を育てる環境作りに貢献する研究成果を挙げられればと期待している。

隠された歴史をさぐる

フ ス レ
Husel

出身国：中国（内モンゴル）

在籍大学：東京外国語大学大学院地域文化専攻

博士論文テーマ：中国政府および中国国民党・共産党の対モンゴル政策（1912-49 年）



私は中国の内モンゴル自治区出身のモンゴル人で、小学校から高校までは、地元の学校で勉強しました。1985年に北京大学哲学部哲学科に入学し、4年後の1989年7月に卒業し、その後、内モンゴル芸術大学（現在の内モンゴル大学芸術学部）文化科で講師として、「近現代ヨーロッパ哲学」の講義を担当しました。講義のかたわら、モンゴルの英雄叙事詩『ゲセル』『ジャンガル』などを素材に、モンゴルの文化・宗教・歴史などについて研究し、20篇近くの論文を発表しました。それらにより、第5・6回内モンゴル自治区社会科学優秀成果青年賞、内モンゴル自治区青年科学技術模範賞などを受賞しました。

1996年から内モンゴル科学技術学院で非常勤講師として「民族理論と民族政策」の講義を担当するようになり、内モンゴルの近現代史の勉強をせざるをえなくなりました。私はモンゴル人として、内モンゴルが中国という国民国家に統合された歴史のプロセスを解明したいと思いましたが、政治的イデオロギーの影響のため、中国で客観的視点からこのテーマを研究するのは困難だと気づきました。

近現代の内モンゴルの歴史・社会・経済・文化などにおいて日本の影響が大きかったということは、中学生のとき、モンゴルの文学・宗教文化を大学で研究している父から教わりました。私自身、研究をすすめるなかで、日本にはすぐれたモンゴル研究の伝統があることを知りました。日本語は、中学のときに、姉の影響で独学で勉強をはじめ、大学でも第一外国語として選択しました。このような理由から、イデオロギー上の制約がなく、かつ研究の蓄積のある日本に留学することを決めました。

1998年4月に来日し、「中国国民党・共産党の対モンゴル政策（1919～49 年）」というテーマで研究を行い、2001年3月、東京外国語大学大学院博士前期課程を修了し、現在、博士後期課程で、「中国政府及び中国国民党・共産党の対モンゴル政策（1912～49 年）」を研究テーマとして勉強を続けています。日本の現代中国史研究者も最近では内モンゴル近現代史に注目して、すぐれた研究を行っていますが、原資料、特にモンゴル語の文献がつかわれていないことは、その主な欠点の一つであると思われます。私の研究は、これまで研究者によって使用されたことのない当時の中国国民党、共産党の関連文書、モンゴル語、ロシア語などの史料に基づいて、モンゴル人の居住する「地域」に焦点をあて、北洋軍閥政府、中国国民党・共産党の対モンゴル政策決定のプロセスとその背景を考察するとともに、内モンゴル社会各層がどのように中国政府及び国共両党の制定した対モンゴル政策を見ていたのかについても検討したいと思っています。

来日してから、モンゴル近現代史をテーマとした2本の論文を発表し、1本は最近、学術雑誌に投稿しました。

博士号を取得後は帰国して、内モンゴル大学にもどり、中華人民共和国成立以降の内モンゴルの民族問題を研究していきたいと思っています。

表面的でない日本文化論を語っていきたい

キム ヒョヌッ
金 賢旭

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科表象文化論コース

博士論文テーマ：翁信仰の形成—中世芸能の成立—



私は日本に留学に来て7年目を迎えます。日本語や日本文化を学びはじめたのは、高校時代からなので、18年ぐらい経ちます。高校時代、日本文化に興味を持ったきっかけは、当時の韓国社会においては日本文化に対する偏見が強く、非常に否定的であり、そこがどうしても納得がいかなかったからです。たぶん歴史的問題による暗鬱な記憶に支配されていたからでしょうが、そういった両国の問題を私たちの世代は乗り越えなくてはいけないという意欲がその頃から何よりも強かったと思います。

大学は自然に日本語日本文学科に進むことになりました。1987年は私が大学に入学した年ですが、韓国においては海外旅行が自由化されて間もない頃でした。初の海外旅行地として日本を選び来日した大学一年生の夏休み、その1ヶ月間を忘れることはできません。日本の文化に接し、たくさんの日本人に出会い、これから何を勉強していくべきかを具体的に考えさせられました。両国の文化は似ているようで、かなり違うところもあります。古代から近現代に至るまでの長い文化交渉のなかで、それぞれがすばらしい自国文化を成立させてきたことがわかってきました。韓国で大学院の修士課程に進学した時に、ある日本語科の先生から「近現代のものもわからないのに、古典はもっと難しいよ」という忠告をいただいたのですが、それでもあえて古典文学や伝統文化の研究をやると決めました。近現代の日本文化も興味深いものですが、もっと深いレベルで日本文化をとらえたいと思ったからです。そして、研究テーマは、躊躇なく古典芸能、特に、能楽というテーマにしました。それは、その後日本を訪れた時出会った、ある能舞台が脳裏から離れなかったからです。初めて「道成寺」という能を見た時、とても衝撃を受けました。最初はうとうとしていたと思いますが、その中でもおぼろげに伝わってくる舞台の上の世界は、異様なものでした。囃子がだんだん激しくなってきたところでは、長い時間極度に集中していたことも手伝って、体が一気にハイテンションになり脱我といっているような特別な体験をしました。その不思議な体験を追求していきたいと思ったのが、能の研究や日本留学に繋がりました。

留学に来て2年目からは、実際に能の謡や仕舞の稽古を始めましたし、能を含めた数多くの伝統芸能の舞台を鑑賞することができ、充実した留学生生活を

送ってきました。特に、周りには指導教官をはじめとして立派な研究者の方々が多く、彼らから大いに教わり、たくさんの刺激を得ることができました。こういったすぐれた研究環境に恵まれ、研究生を経て修士過程から博士過程に進み、今に至るまで研究を深めてきて、研究者として歩んでいく自信を得ることができました。現在取り組んでいる博士論文のテーマは、能、あるいは日本芸能のルーツである「翁猿楽」の研究です。このテーマで論文を完成させ、博士号を取得した後は、韓国の大学に勤め、研究者としての道を歩むつもりでいます。

同時に、韓日両国の文化交流に力を尽くしたいと思っています。最近、両国間の交流が盛んに行われるのは、とても望ましいことですが、深いレベルでの国際交流を目指し、韓日両国のパイプ役を立派に果たしたいと思います。こういう希望は、すでにいろいろな文化交流事業に参加する形で、実現させてきました。1999年の9月には、「日韓21世紀文化交流」の能と狂言の韓国公演(観世流鉄仙会など)の企画に参加しました。ソウルと地方二ヶ所での公演で、司会と通訳を勤めました。舞台が始まる前、当日上演する演目や能に関しての基礎知識を観客に与えるために韓国語での説明を行いました。これをきっかけとして「韓日宮中音楽の交流」(2002年5月7日～12日)、「韓日巫俗のシンポジウム」(2002年5月18日)など、様々な公演や交流会を手伝うことになったのです。目下、私の実技の師匠である永島忠修師主催の韓国能楽公演を、来年から再来年にかけ実現する予定です。大学院生の身分なので、時間的な制約もあり、控えめに参加していますが、自分がこういう文化交流の場にとっても向いているということが分かってきました。

来日以来、デスクに向かう研究からだけでなく、自らの体験を通じてしっかりと日本の文化の深層に触れてきたつもりです。また、様々な交流活動を行いながら、たくさんの人と友達になり、幅広い人的ネットワークの輪を得ることができたのは、留学の一番大きな成果でもあります。今後、研究者として独り立ちできるよう、博士論文を完成させ、残された留学生活も頑張っていきたいと思っています。そして、日本研究家として「日本」と真正面に向き合い、表面的でない、私なりの日本文化論を語って行きたいと思っています。

日本に留学するまでの私

カク ジ ウン
郭 智雄

出身国：韓国

在籍大学：立教大学大学院経済学研究科経営学専攻

博士論文テーマ：企業組織における組織イノベーション・プロセスの理論的考察と
実証研究



私は、韓国の釜山で生まれ、大学を卒業するまで韓国の第2の首都である釜山で生活をしてきました。

私の家族を紹介すると、大家族とも言える祖母と両親、妻と娘一人の6人家族です。

私は、6歳から約20年間、韓国の伝統的な武道である跆拳道（Taekwondo）を定期的にやってきましたので、健康や集中力の面では大変自信を持っています。

私は韓国の大学で行政学科に在籍し、行政学の一般的な知識と理論体系の習得だけではなく、組織の経営効率性について何より関心を持ち勉強してきました。特に、70～80年代にかけて先進各国で推進されてきた公企業の民営化・私企業化の過程とそれによる経営効率性の増大、さらにそうした民営化・私企業化が国民の生活にどのような影響をもたらしたかについて、様々な側面から研究をしてきました。

こうした関心から企業組織に問題意識が変わり、経営組織に関するより専門的な研究が必要であると考えるようになり、そのための進路を模索していたとき、指導教授から日本への留学を進められました。20世紀、世界経済の中核的存在となるまでに成長した日本企業の経営組織に関する研究を通じ、韓国企業の経営組織の将来的な経営効率性の増大への道を発見できるのではないかという重要な示唆を頂いたのです。当時、すでに私も日本の企業組織に大きな関心を持っていたので、迷うことなく日本への留学を決めました。

教授の推薦もありましたので、93年に、大学卒業と同時に日本へ留学し、日本語学校に通いながら、

日本語を学習し、その後基礎的かつ専門的な経営学の理論についての研究のため、立教大学大学院経済学研究科経営学専攻に入学しました。

96年に経営学修士を取得し、一時帰国し興国生命株式会社に就職しました。就職先では、本社で海外との取引を中心とした再保険の業務と企業を取り巻く環境の急激な変化に対応できる企業組織を作るための組織革新の業務などに携わりました。しかし、韓国の経済不況とともに企業の環境も急激に悪化し、当社も組織革新の一環として大幅な構造調整を行いましたが、自社に適切な組織革新のモデルを模索することのないまま、欧米先進国企業のモデルを一方的に取り入れたため、機能不全や失敗が続きました。そこで私は、韓国企業にとって適切なモデルの模索と構築のための研究をすべきだと思い、再び留学を決心しました。

博士号取得後の進路希望としては、韓国に帰り、自分の母校で学生の教育・指導に携わりながら、研究をさらにすすめ、環境の急激な変化のなかで経済社会の変転する現実を常に直視し、そこから新たなビジョンを提示できるような有能な経営組織の専門的研究者になりたいと思って、現在、研究に専念しているところです。

境界線での思考力を得るために

りん しょうよう
林 少陽

出身国：中国

在籍大学：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

博士論文テーマ：西脇順三郎の詩学理論研究—言語的視点から



1979年9月に、まだ16歳の少年であった私は中国の廈門大学日本語科に進学しました。廈門大学を選んだ理由については、広東省出身の私が揚子江以北の大学に行きたくなければ、選択範囲内にある「全国総合重点大学」(日本の旧帝大にあたる大学)はわずか四、五箇所しかなかったからです(廈門大学はその一つです)。英語科に合格した私が日本語科を選んだのは、ある日日本語辞典を見たというごく偶然なきっかけで、強い好奇心で日本語、日本についてとても知りたくなったからです。この「好奇心」は私の運命を決定したといっても過言ではありません。大学の4年生から日本近代文学関係の授業が大幅に増え、日本近代文学の研究を生涯の仕事にしたらどうかと真剣に考えはじめました。私は当時日本研究の人材が一番集まっているといわれている吉林大学を選び、1985年9月に吉林大学大学院日本文学修士課程に進学しました。

修士の2年生から私は段々中国の日本研究の問題性を懷疑しはじめました。それは学際的な交流をする力もなく、問題意識も希薄であり、いわば高級外国語学校のような学部体制の延長線上にあるようなものです。卒業が近づくにつれて、そもそも日本近代文学・思想を主とする「日本学研究」という学問自体が中国にまだ確立できていないのではないのかと私は漸く意識せざるを得なくなりました。今振り返ってみれば、この認識の獲得こそ私の修士3年間における大きな成果の一つです。というのは、このことをきっかけに私は真剣に「中国における日本文学・思想研究とは一体何か」という問題を考え始めたからです。

その後政治的な激動や社会的経済的な変化、並びに自生活などの理由により大学を離れましたが、仕事のかたわら創作と批評をやりながら、中国における日本文学・思想研究の在るべき姿とその意味に対する考えは、自分の人生に対する思考と混ざりながら、私の内部に止まることがありませんでした。色々なことがあり、1999年4月に私の留学計画がやっと実現できました。

私の日本留学の決定は、このように、中国の日本研究の現状に対する私の不満とそれに対する強い期待感と、並びにある種の自己反省などの要素が混雑的に作用した結果であります。私にとっての日本留学は、中国の問題を頭に置きながら日本で学び、日本で日本を研究することを意味しますが、「中国における日本文学・思想研究」とは、中国の思想・文学に対して「日本」という視点を導入することを意味していると私は理解しています。そして、「中/日」という二項対立的な枠組みを乗り越えながら、ある境界線で思考することをも意味していると私は理解しています。そのような視点での日本研究は、ある意味では同時に中国研究でもあります。この留学経験で挙げた成果をもとに、卒業後、中国の大学で日本文学・思想の研究者として中国語学術圏におけるほかの人文系の学科にも発信できるような「中国の日本文学・思想研究」の確立に貢献し、同時に教育者として学生を育成することが私の夢です。

日中技術交流の発展に向けて

りく やくほう
陸 躍鋒

出身国：中国

在籍大学：東京商船大学大学院海洋情報システム工学専攻

博士論文テーマ：海底音響画像からの有用情報抽出と利用に関する研究



私は、1982年中国文化大革命後の最初の大学生として華中理工大学（現華中科技大学）の情報工学部を卒業しました。その後華中理工大学の助手、講師を経て、日本で1年間の留学を経験しました。帰国した後北京大学に転勤し、1996年1月にSTA（元科学技術庁）特別研究員として再来日しました。1997年から2001年まで(株)エス・イー・エイにて海洋情報システムの研究開発に従事し、現在東京商船大学大学院博士後期課程で海洋情報システム、コンピュータビジョン分野の研究を行っています。

近年、海洋情報システム、コンピュータビジョン分野にて20以上のプロジェクトに参加し、海洋調査用GPS導航システム、ドップラー（Doppler）潮流計測システム、サイドスキャンソナー（Sidescan sonar）海底地形調査システム、遠隔海洋モニタリングシステムなどを開発し、海底三次元構造の再構成、海底音響画像のモザイクキング、動画解析による海上移動体の自動検出などに関する研究を行いました。これらの研究開発に関し、2000年に海底三次元構造の再構成方法を特許出願（2000-362425）し、(株)エス・イー・エイから（技術開発）努力賞、東京商船大学後援会から学術発明創造性研究等奨励金を頂きました。

何故日本に留学して来ましたかと、よく友達から聞かれました。直接的には日本で先端技術及びそれら先端技術が生まれ育ってきた社会環境など、学びたいことがたくさんあるのが動機ですが、それ以上にたぶん何か縁があったのだと思います。実際、私の曾祖父は中国最初の日本留学生の一人でした。彼と一緒に日本に留学に来た友達は中国近代史に有名な蔡鍔将軍です。彼らは日本の兵法・維新・立憲といった一連の近代的な思潮に大きく影響を受けて中国の近代化を促進しました。残念ですが、曾祖父は僅か28歳で亡くなりました。子供の時、父からこの話を聞きました。当時父の話を完全に理解できませ

んでしたが強い印象を受けました。中国の改革・開放に伴って国際交流も増えてきました。1988年、私は優秀な若手研究者として、国に選ばれて日本に留学に来ました。飛行機から降りた瞬間、私は曾祖父の留学したところにやってきたと感激しました。

1996年、再び日本に留学するチャンスに恵まれました。最初、国立科学技術政策研究所の特別研究員として招聘され、その後、日本の企業に入って海洋情報システム、海中コンピュータビジョンに関する研究開発に従事しました。IT最先端技術を習うために日本に来ている私は、技術の日進月歩に伴って知識の陳腐化が速く、もっと広くしかも学際的な知識と能力が要求されていることを実感しました。このような事情で再び大学のドアを叩くことになりました。

近年私は、イギリス、オーストラリア、アメリカ、カナダ、日本、中国などの国を訪問したり、国際会議・国際展示会に参加したり、研究者・技術者達とディスカッションしたりする機会がありました。海洋情報システム、海中コンピュータビジョンはまだ新しい分野ですので、努力しなければならない未開拓の仕事がたくさんあります。博士号を取得した後も、大学や研究所などでこの分野での研究を継続することを希望しています。地球温暖化をはじめとする地球規模の気候変動、地震・自然災害などに対する予測・対策は、人類にとって永遠の研究課題ですが、自分の仕事をこの研究課題に取り組むことと位置づけ、たとえわずかでも役立つことができれば幸せだと思っています。研究のほかには、一つの夢かもしれませんが、自分のIT知識を活かして、インターネット技術を用いる日中ハイテクノロジー交流ネットワークを作って、IT、環境科学技術領域をはじめ、いろいろな分野の日中技術交流に向けて、掛け橋として自分の力を微力でも捧げていきたいと考えています。

言語との触れ合いは文化との触れ合い

パク ジョンヒ
朴 貞姫

出身国：中国

在学大学：明海大学大学院応用言語学研究科

博士論文テーマ：日朝中空間概念の研究



言葉の世界の魅力は、言葉自体の面白さ、奥ゆかしさだけにあるのではなく、言葉を取り巻く環境、歴史、文化・社会などの様々な要因を背景にした人間の知のメカニズムを教えてくれるところにある。言葉の背景には文化があり、言葉は文化とも言える。多言語との触れ合いは多文化との触れ合いでもあり、多言語の仕組みを探るということは多文化を背景にする人間の知のメカニズムを探ることでもある。私の研究は、朝中日3言語を無難に駆使するトライリンガルになるまでの自分の経験を土台にしている。そして、従来の言語研究とは違う、人間があつての言語、文化を背景にした言語研究を試みる。

中国に生まれ育ち、母語は朝鮮語、公用語は中国語であるバイリンガルの私は、1977年、運命に晒されて、物理学科の受験者から日本語学科に入れられ、日本語と巡り会い、トライリンガルの人生行路を歩み始めた。以来、朝中日3言語は、いずれも私の一部として私と運命を共にしてきた。一つの言葉では一つの世界しか見えないが、3つの言葉なら3つの世界が見えてくる。

来日までには、東北教育出版社日本語教材編集室において8年間室長の職にあり、朝鮮族中学校・高校向けの日本語教材の研究に従事してきた。その期間、日本国際交流基金の助成により2回来日し、日本語教材研究活動を行った。1993年から1998年にかけて、その研究成果（教科書全巻、1-8）が続々と出版され、1996年には副教授に昇進した。しかし、自分の知識と能力に限界を覚えた私は、1998年9月に断固として苦しい私費留学を決意した。主人と娘の理解が最大の力になったのである。

概念範疇の研究は認知言語学の核である。空間概念は、言語を問わず最も基本的な概念である。本研究は、空間概念の表現における日朝中3言語それぞれの仕組み、言語の共通点と相違点を探り出して、その原因を言葉の背景にある人間の認知の捉え方に求めることである。現在、指導教授の厳しいご指導と監督の下で自分の研究もますます充実している。

博士号を取得後は、帰国して日中朝3言語を中心とした多言語教育・研究活動が続けたいと思っている。できれば、東アジア言語文化研究所を発足し、中国（台湾・香港）での日本語・朝鮮語（韓国語）研究、日本での中国語・朝鮮語（韓国語）研究、韓国での日本語・中国語研究のためのネットワークを作り、東アジアにおける日朝中3言語の研究交流活動を本格的に行いたいと思っている。

日本ー私の児童文学世界への扉ー

ティシ マリア エレナ
Tisi, Maria Elena

出身国：イタリア

在籍大学：白百合女子大学大学院児童文学専攻

博士論文テーマ：日本近代児童文学におけるイタリア文化の受容
ー宮澤賢治を軸としてー



私はイタリアのボローニャに生まれた。高等学校では西洋文化全般を学び、大学では世界の反対側のことを勉強したいと考え、文学部東洋文化学科を選んだ。いくつかの国の文化を勉強した後、日本文化の研究に集中し、日本文学で卒業論文を書いた。日本文学の研究を深めるために、また、本だけで親しんだこの国を肌で知るために日本留学を決意したのは当然のことであった。

当時宮澤賢治の作品と偶然に出会い、彼を通じて児童文学の世界に入った。ボローニャ・ブックフェアで宮澤賢治と児童文学の本を手に入れる機会があり、日本に留学した際には、宮澤賢治と児童文学の研究をしたいと考えた。そして、学んでいく中で日本児童文学が豊かな文化遺産であることを理解し、興味深く思い、自国へ知らせたいと思うようになった。

その後、慶應義塾大学の奨学金を得て、日本語を勉強しながら、宮澤賢治について学び始めた。

そして、白百合女子大学で宮澤賢治と児童文学を専門的に研究するようになった。宮澤賢治の作品には、イタリア文化との関係があるということがわかってきたため、伊日の児童文学の関係について興味をもつようになった。また、イタリアの現代の児童文学作品を調べ、白百合女子大学に紹介することも始めた。

日本では児童文学の研究者と知り合い、共に活動をした。日本児童文学学会に参加し、国際児童文学学会にも参加した。そして児童文学と児童文学研究の意義がわかってきた。すなわち児童文学は子ども

が成長していく過程で読まれるので、子どもの人格形成と大いに関係がある。ゆえに、児童文学には、重要な責任がある。児童文学の研究は専門家だけのものではなく、万人のためのものなのである。更に、今日の世界における紛争の理由の一つは、異文化理解の欠如によると思うので、子どものころから児童文学を通じて異文化理解をしていくことは、人格形成のためにたいへん大事なことであると思われる。従って私は児童文学がもつ有益な役割に協力し続けたいと思う。

私はイタリア人なので、児童文学を通じてイタリアと日本の架け橋となり、両国の交流に貢献したい。そのために今後も研究を続けながら、両国に児童文学作品を紹介していきたい。特に、イタリアでは日本の作品があまり知られていないので、翻訳・出版したいと考えている。

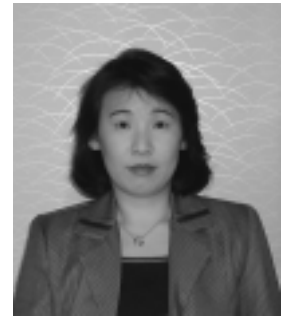
在日ブラジル人の家庭

ヤマグチ アナ エリーザ
Yamaguchi, Ana Elisa

出身国：ブラジル

在籍大学：一橋大学大学院社会学専攻

博士論文テーマ：在日ブラジル人の「家族問題」とコミュニティ形態の影響



日本留学を決めた理由は大きく2つに分けられます。1つ目は、私が日系ブラジル三世であるため、まず日本語を学習したいという強い願望がありました。ブラジルでは、三世以降の世代になると日本語ができない若者がほとんどであるといっても過言ではありません。私が住んでいた地域は日系人が少なく、日本語の学習が困難な状況でした。また環境の影響もあり、日本語を習得していないだけではなく、日本の文化や習慣等が伝わらなくなってしまうという点からも、ぜひ日本へ留学したいと思いました。

2つ目の理由は、日本語の習得だけではなく、高度な専門知識を身につけたいということで、そのため日本の大学で博士後期課程まで進学しました。同時に、私と同じように多くの日系ブラジル人が日本で働くため来日し、それに伴って彼らは深刻な問題を抱えており、少しずつでも研究をしながら、彼らの手助けをしたいと強く思っています。

博士号取得後の計画

<就職の面>

博士取得後は、私が学んだ知識などをブラジルで生かすため、ブラジルの大学や研究機関やブラジル政府機関等で就職をしようと考えています。

<研究の面>

博士取得後は、日本から帰国した日系ブラジル人の家族を対象に、研究を継続しようと考えています。日本で行った各地での現地調査は、ブラジル帰国後の日系ブラジル人との比較研究もでき、新たな研究成果や社会貢献が大いに期待できるものと思っています。

<社会貢献の面>

帰国後に研究してきた貴重な知識と情報をブラジルで生かし、重要な役割を果たせると確信しています。ブラジルには日本から帰国した日系ブラジル人の家族を助けるために多くのNGOが存在しますが、その多くは資源（資金・情報・人材等）不足で運営ができなくなっているという深刻な状況があります。そのため、私が持っている資源（日本で作ったネットワークや収集した様々な情報や私の知識・経験等）を役立てたいと考えています。それに長年かさんねた研究を元に多くの日系人の家族および子どもたちに役立つためにNGO作りができると確信をもっています。特に、日系人の子どもたちは帰国後に教育や適用等に深刻な問題を抱えております。

<最終の目的>

ブラジルは貧富の格差が広がり、多くの子どもたちが犠牲者になり、深刻な社会問題になっています。そのために、低所得層の多くの子どもたちは路上で生活をし、教育すらも受けず、生きて行くため、あらゆる手段を使いながら大人になっていきます。そのような子どもたちのために、何かの方法で役立ち・助けたいとブラジルに住んでいたときから今でも強く思います。しかし、このような問題は様々な問題が絡み合っているため、複雑であることを承知していますが、帰国後に政策提言やNGO作り等という方法を真剣に取り組みたいと考えています。

今の私があるまで

ユン ヒスク
尹 熙娥

出身国：韓国

在籍大学：東京大学大学院工学部研究科材料学専攻

博士論文テーマ：ナノ構造を制御した新機能性メソポーラス材料の合成と
その電気化学的物性



私は、韓国の南端に位置した静かで綺麗な町の鎮海で、4人兄弟の3番目として生まれました。父は韓国の国技であるテクォンドの館長であったせいか、とても厳しく頑固な人で、私の家族には絶対的な存在でした。その反面、母は限りない優しさと広い心の持ち主で、頑固な父親と私達兄弟の中を衝突させることなく温和にまとめてくれました。このような家庭環境で大きな問題もなく私は元気で沢山の夢を持った人間として育ち、新しい材料の開発で少しでも世の中に役立ちたいと思って、材料工学を学びました。大学での勉強はとても楽しかったのですが、いつも何か物足りなさを感じていました。そんな大学2年の春、学科のセミナーで元京都大学の教授である作花済夫教授の講演を聞き、より先進の技術と研究環境が揃っている日本への留学に憧れるようになりました。その時から、日本語の勉強や日本の大学院の入学試験情報の収集など、本格的な留学への準備を進め、大学4年の時には日本語能力試験一級を取ると共に、専門の勉強においても最善を尽くし、卒業するまで学科のトップの座を失わずに頑張りました。

しかし、日本への留学には2回の山場がありました。最初は頑固な父親を説得することで、ちょうどその時期に母が病気で倒れたので、私が家事を任されてしまい、父親を説得できず、一度は留学を断念するしかありませんでした。

その後、幸いに母親の回復が早かったので、母親の助けをもらい、父親を説得することには成功したものの、今度は父親の会社が倒産してしまい、留学

は再び諦めざるを得ませんでした。大学を卒業後ずっと勉強してきた日本語の実力を活かして就職し、1年間稼いだお金で、日本留学への未練を掃うと共に、少しでも父親の力になりたく、ビジネス学を学びに日本へ来ました。しかし、ビジネス学校を卒業するころには父の会社は復帰することは不可能な状況になっていたので、韓国に戻ることを止め、今度こそ私の夢だった日本の大学院で材料学を学ぶため、東京大学大学院へ入学することを決めました。

大学院への入学まで、いろいろな試練があったせいか、今ここで研究が出来る時間がとても大事に感じられます。幸いに研究環境および人々にも恵まれ、修士課程・博士課程ともに沢山のことを学び、体験することができました。特に今は産業技術総合研究所の方と共同研究をするチャンスもいただき、現場と学校両方の仕事ができ、より効率的に研究を進めることが可能となっております。卒業までこの機会を生かし、一人前の研究者になれるよう、最善を尽くしたいと思います。

卒業後は帰国し、今まで学んだことや体験したこと、感じたことなどを韓国の後輩たちに教えたいと思います。それから、少しでも日本と韓国、そして世界に役立てるよう、新規機能性材料の開発に尽くしたいと思います。

日本への憧れとわたしの夢

ゾーリー
臧 俐

出身国：中国

在籍大学：東京学芸大学大学院学校教育学（教育方法論）専攻

博士論文テーマ：初任者研修政策の形成・実施課程に関する研究



日本はわたしが憧れた国である。それは経済大国だけでなく、教育大国でもあるからである。日本は早くも江戸時代から寺子屋などを通して国民教育が相当普及していた。その結果、国民全体の資質が向上し、礼儀正しい日本民族ができ、今日の経済大国といわれる日本を作り上げてきた人的資源の基礎的蓄積が成されることとなった。教育がいかに大切であるかが分かった。

しかし、わたしの国では、基礎教育の普及はやっと1986年4月に公布された「中華人民共和国義務教育法」によって踏み出されたばかりである。一体、日本の教育は歴史的及び今日的にどうなっているのか。中国の大学で11年間教員をしていたわたしは、日本の教育を知りたくなり、日本留学を決めて来日したのである。わたしの留学の目的は、第一に、日本の教育についてしっかりと勉強し、研究し、また、日本の教育で学ぶべきところを中国に紹介すること、第二に、日中の教育交流の橋渡しに役立つことである。

わたしは12歳の時、地元の四川外国語大学の附属中学校（中高一貫制）で英語の勉強を始めた。そして、その時から、国際交流を意識することとなった。以後、四川外国語大学で日本語を専攻している時、いつか日本との交流、また交流の橋渡しをすることをはっきりと目指すようになった。

日本に来て、千葉大学の教育学研究科（修士課程）で日本の教育を勉強し始めて以来、日中の教育交流にも関わってきた。2年に1回（1997年以降は3年に1回）の日中教師教育研究シンポジウムの通訳（第4回と第5回は主席通訳を務める）や翻訳、

日本人教育専門家の論文の中国語翻訳等、日中の教育交流の橋渡しにささやかながら力を尽くしてきた。

2000年度からは、日本の教育について更に勉強したく、東京学芸大学博士課程で勉強と研究を続けている。

わたしの夢は、日本の教育研究に携わることと、日中間において教育交流を中心に、他の交流の面でも積極的に取り組むことである。